

「石井十次の孤児教育思想」

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科 山本 浩史 先生

講演要旨

はじめに

日本社会福祉の歴史において、岡山県には学ぶべき出来事や人物が多く存在している。例えば、明治期においては、留岡幸助（高梁市）、山室軍平（新見市）、片山潜（久米南町）などの人物であり、大正期では、現在の民生委員法の前身となった済世顧問制度が創設されている。そして、昭和初期には長島愛生園、邑久光明園に見られたハンセン病患者収容の歴史、戦後では人間裁判（朝日茂訴訟）等がある。しかしながら、現在、これらを取り上げた研究が盛んに行なわれているとは必ずしも言えない。演者本人も、これまでは社会福祉学の立場から高齢者医療福祉、ボランティアコーディネート、教育学の立場から福祉教育、体験学習に関する研究を行ってきた。しかし、様々な研究や実践のなかで「福祉とは何か」といった疑問にぶち当たった。この疑問への糸口として、現在のような社会保障制度も社会福祉制度もない明治時代に、自らの思いにより社会事業を立ち上げた社会事業家の思想にその答えがあると考え、石井十次研究を始めたのがきっかけであった。ここには純粹に福祉に取り組んだ思想と明治日本におけるボランティアリズムがあると考え。

1. 研究の目的とその視点について

本研究の目的は、石井の生涯にわたる孤児教育思想を研究の対象とし、石井がなぜ孤児救済に拘り、なぜ孤児教育を天職としたのかについて明らかにし、その孤児教育は石井にとって、どのような意義があり、どのような目的であったのかについて、検証することが大きな目的であった。また、その命題は「なぜ石井は孤児救済を自分の使命としたのか?」「どのような理念のもとで孤児を救済したのか?」であった。しかしながら、この研究を始め7年目に入るが、分かったことは、ほんの一部のことである。

研究方法としては、石井が日誌に記した言葉を整理し、その言葉からキーワードを見出し、その言葉の意味、あるいは、その言葉の変容を整理し、これを解釈するなかで、石井の孤児教育思想を明らかにしようとした。そのため本研究では、主に石井の日記が整理された石井記念友愛社による『石井十次日誌』（以下、日誌）の記述を中心にその思想を分析した。その他にも、岡山孤児院が発刊した『岡山孤児院新報』、『岡山孤児院』等も使用し、石井が読んだとされる書籍についても可能な限り検討した。また時代区分であるが、次に記す石井の日誌（日誌：明治44年4月8日）をもとに（1）第1期・1890（明治23）年以前、（2）第2期・1890（明治23）年頃から1893（明治26）年頃まで、（3）第3期・1894（明治27）年頃から1897（明治30）年頃まで、（4）第4期・明治30年代、（5）第5期・明治40年代から晩年までの5期により分析したが、本講演では便宜上、明治20年代、明治30年代、明治40年代～晩年の3区分により説明する。この講演では、研究の全てを、そして、石井の全てを紹介することはできないが、孤児教育のポイントとなる価値観を中心に説明したい。

「一、明治二十三年頃より自然のままに発展せし予の思想は二十七年『ルソー』の『エミール』をよんで千載の知己を得二十八年に至りて実業的に独立を宣言するに至り」

「二、終に二十八、二十九、三十の三年間の苦戦奮斗の結果三十年の十月赤痢病のために大打撃を受けしために思想は俗化して」

「三、文部省主義の足下に胃をぬくこととなれり而して小学校、中学校、女学校に我党の青年男女を入れることとなり ルソー主義は見事に失敗せり」

「四、然るに敗北の十年間即ち俗化の十年間の経験によりて いまは再び真理の光明を快復するの時節となれり 真理は到底埋没することは出来ぬ」

「五、昨年正月二宮先生の自然主義に覚醒せられ- 鉄鎌主義の名によりて二十七年の『インスピレーション』は復活し来る」

「六、特に二月八日『二十世紀の児童の世界』をよみて予の胸底に睡眠して居った『ルソー』主義は奮然として活動を始めたなり」

「七、加之四月六日『トルストイ』言行録にて『ルソー』主義の化身『トルストイズム』をよみ一層明白に天来の声をきくことを得て愉快に堪へず」

「八、天地の活霊は真に労働の衷に宿る 鉄鎌主義は即ち真正なる自然主義なり」

(日誌：明治44年4月8日)

2. 先行研究における論点

石井の孤児救済を先行研究では、大きくわけて宗教的救済と現世的救済の二者択一で論じられている。まず宗教的救済の立場では、姜（2005：144-3）が「社会的志向の希薄さは、石井十次思想の最大の特徴ではないかと思う」「人間の肉体を救う「慈善」（＝社会的事業）というより、人間の靈魂を救う「教育」（＝宗教的理想）に置かれ、また終極的には地上の樂園を造営する、神の事業として成就しようとする志向があった」、「孤児の人格的形成、自活、独立などすばらしい理想主義の一面があるが、現実社会への扉が閉ざされている宗教的閉鎖性に問題があったように思う」と指摘している。さらに石井思想研究の第一人者である柴田（1978：39）は「とにかく彼の行動は神の使命として動機づけられているのである」と指摘し、「石井の行為は神の使命によってなされるのであるから、彼はその行為の目的とするものの可能性を信じてうたがわなかった」、「石井は自己の行為が単なる自己の行為ではなく、神の行為の補助的行為にすぎないことを自覚していた」、「神の使命においておこなうならば商業も殖産事業も簡単に成功するかのようには考えていた。このような楽天的な一面は生涯を通じてみられる」（柴田1978：238-9）等と述べている。

次に現世的救済の立場では、田中和男の研究がある。田中（2000：4）は、石井はその主観的な意図としても健全なる国民の形成を重視しており、国民統合という国家形成において、重大な役割を果たすことになることと指摘し、石井を極めて国家主義的に捉えている。このことを池田（2005：10）も、石井の「国家の良民」との発言は、人びとの個別の良心にもとづく、道徳に従わせようとする理論を内包し、この言葉を一人ひとりに平等で生得的な自然権ともいふべき「天与の幸福」を説くことと並列させることは矛盾しているとするが、この矛盾は慈善事業の近代性が本来内包する矛盾であると説明している。さらに「国家の良民」という意識は、個人一人ひとりの価値より、それを統治する国家主義的性格を示し、石井の孤児救済事業を専制的権威により君主に一方的に随従させる東洋の「公」あるいは「おおやけ」によるものであったと説明している。この他に、日本社会事業史の大家である吉田（2003：241-3）も、孤児救済において、石井が国益の増進を明治プロテスタント慈善事業に位置付けていることを見落としてはならず、石井が慈善、博愛を通じた天皇崇拜の念が強い愛国的国家主義者であり（吉田1994：114）、富国の道も慈善・博愛の道も愛国として共通していたと指摘している。

この石井の愛国的国家主義者について柴田（1978：20）は、石井が儒学教育を受けていたこと、石井の父が西郷軍として西南戦争に参戦していることを取り上げ、このような環境で成長したからこそ、石井は過激な国家主義的な傾向をもったと指摘をしている。このような指摘が先行研究においてなされているのだが、石井の「国家観」を理解しなければ、その解釈は異なる意味を持つ。このような中、田中真人（1999：226-7）は、近代天皇制において天皇は明治憲法体制上の統治主体であると同時に、国家神道の最高主宰者として位置付けられていたが、石井は天皇の宗教的性格については意識的、あるいは、無意識的になのか、まったく無視し、キリストの福音をいまだ享受していない多くの人民と同様に、福音を説かれるべき対象のひとつとしていたかのように見えると指摘している。

以上、先行研究における2つの立場について取り上げたが、その中間的な立場に細井の研究がある。細井（2009：372）は「石井の思想の変容ないし変節の問題を一思想家の思想の揺れの問題と同じように捉え、その思想の伝統への回帰、あるいは、国家主義、帝国主義への順応としてのみ捉えることは適当ではない」とし、「石井の信仰や思想のあり方の変容は事業展開とそれを取り巻く環境のあり方と常に連動しているのであって、どちらが先で、どちらが後か、というふうに単純に割り切れるものではない」と指摘している。その細井は石井の救済を「宗教的救済」と「郷里の伝統教育への回帰」として捉えようとしている。

3. 時代ごとの特色

(1) 明治20年代

明治20年代における石井の孤児教育のポイントを整理すると次のとおりある。

- ・孤児教育観の成立（「天父の愛子が此惨状悲況に陥る所以のものは教育なければなり」）
- ・孤児観の成立（「自業自得（の結果）にあらずして」「吾人の兄弟姉妹」「天父の愛子」）
- （『日本孤児教育會趣旨書』（明治20年8月4日）、『孤児教育教育會趣旨書』（明治20年8月20日））
- ・明治20年代前半は孤児教育の目的に「国益の増進」等の記述が見受けられた。

・孤児教育のパラダイム転換が明治22年に見られた。

（国家の良民、普通の良民への育成から→「今日までは天下の孤児を救ひ日本の良民となすにありしが其の理想進んで高尚となり眞に天国の旅連にして神の国の良民となすの責任ありと思ひ転々心中の喜びと敬愛とを増加せり」（日誌：明治22年2月16日欄外）

- ・特に明治23年以降は宗教的救済色が濃かった。（クリスチャンホームの形成が理想の孤児院の姿）
- ・天職観の成立も見られた。（後年プロテスタントに見られる天職観から独自の天職観へと変容）
- ・明治の社会を安逸で道徳の荒廃した社会であると捉えていた。これが明治27年頃にルソー思想と結びつく。
- ・明治政府の教育行政に対しては否定的な態度を表し、労働学問並行主義の教育理念を確立した。（ジョン・ロック、ペスタロッチ等の思想がそれを補強した）
- ・知識注入の教育を「死せる教育」と比喻し、石井にとって、ルソー主義による自然の発達（自然教育）、実業教育（自活）が「真正な教育」となる。
- ・孤児教育により社会改革を目指そうとした（理想の人物に孤児を育て社会に送り出す）。など

以上のようなポイントが、明治20年代の特徴であるが、明治28年、赤痢の流行により岡山孤児院は打撃を受ける。これが明治30年代を敗北の10年、思想の俗化の10年と石井を言わせた一つの要因となる。

（2）明治30年代

明治28年における赤痢の影響により孤児院は財政難となった。その財政は、寄附金や賛助金に依存した経営が続いていた。しかし、一方では岡山孤児院が社会的に認められてきた時代でもあった。このような背景の中で、特に注目するのは、これまで非難してきた明治政府への接近である。これらを踏まえ、明治30年代を整理すると次のようにまとめられる。

- ・日露戦争の影響が経営面だけではなく、石井の内面、孤児教育にも大きく影響した。

（殖民教育により孤児を育て、天国の民としてではなく、海陸軍の血を流したる清韓に殖民として送り出す）

- ・天皇からの下賜金、政府要人視察（樺山文部相（後に岡山孤児院の顧問）、清浦司法相（同じく顧問）、伊藤博文等）があり、石井自身は叙勲、岡山孤児院は財団法人として認可を受けた。
- ・明治38年無制限収容主義を表明、明治39年5月には、収容児が最大の1,200名となる。

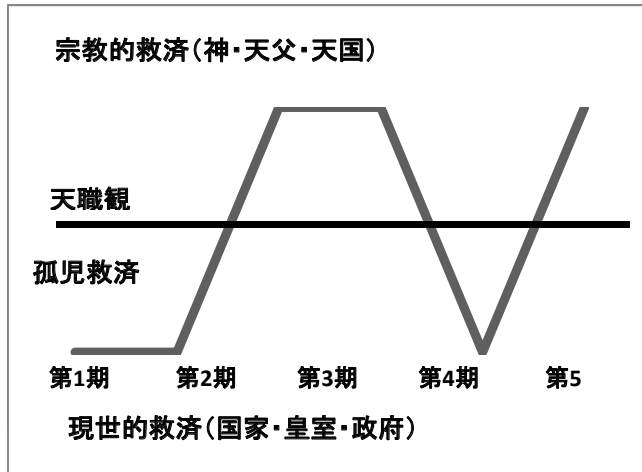
このように、明治30年代は明治政府との接近があり、その孤児教育も明治20年代の宗教的救済と比べて現世的救済での意味合いが強かった。後に石井はこの明治30年代を「文部省主義の足下に胃をぬぐ、ルソー主義の失敗」とも振り返っている。

（3）明治40年代から晩年

明治40年代は石井にとって晩年の時期であり、石井の独創的な思想が創設された時期でもある。例えば、キリスト教と報徳思想を結びつけた「基徳教」、孤児教育方針においては「岡山孤児院十二則」の策定、岡山孤児院憲法の制定（「信天教」）等である。またこの明治40年代はルソー主義の復活でもあり（『トルストイ言行録』等による）、鋤鎌主義が成立（キリスト教、二宮尊徳、西郷隆盛らの思想による）している。特に注目したいのが、孤児院の独立自活を宣言し、「岡山孤児院を根本的に茶臼原に移転し農業本位の理想的孤児院を経営す可し」（日誌：明治43年1月27日）の記述からもわかるように農本主義を主義とし、「鋤鎌をもって神に事ゆるの国民」（日誌：大正2年8月20日）等の文脈からもうかがえるように、鋤鎌主義による孤児教育と理想の天国の建設が孤児救済の意義となる。この理想の姿については、「中世紀の修道院が土地を開拓して独立の生活をなし或は伝道或は慈善事業を経営して文明の中心たりしことをきき」（日誌：明治43年8月3日）、「『モルモン』教徒が猶太州に理想国を建設したる如く我党は児湯郡原野に農業本位の理想的天国を建設せむ」（日誌：明治44年3月23日）等が理想の姿となっている。

4. 結論・まとめ

先行研究では二者択一の議論で石井の孤児教育が論じられていたように見受けられる。しかし、石井の孤児教育は両者の間を揺れ動いていたと言える。そして、石井の内面において、生涯を通して一貫していたのは、自らの信仰による天職観であり、これらを機軸に、時には現世的救済に重きが置かれ、また時として宗教的救済に重きが置かれ、孤児教育が実践されたのである。



引用・参考文献

- 細井 勇 (2009) 『石井十次と岡山孤児院-近代日本と慈善事業』 ミネルヴァ書房
- 池田敬正 (2005) 「石井十次と近代日本」平成13年度～平成16年度, 文部科学省科学研究補助金(基盤研究(B))(1)『石井十次と岡山孤児院の養護実践の基礎的研究』6-12
- 姜克 實 (2005) 「石井十次の思想新論・その社会性をめぐって」岡山大学文学部『岡山大学文学部紀要』115-44
- 柴田善守 (1978) 『石井十次の生涯と思想』春秋社
- 田中和男 (2000) 『近代日本の福祉実践と国民統合 留岡幸助と石井十次の思想と行動』法律文化社
- 田中真人 (1999) 「石井十次の皇室観・国家観」同志社大学人文科学研究所編・室田保夫・田中真人編著『石井十次の研究』同朋舎, 223-244
- 吉田久一 (1994) 『日本の社会福祉思想』勁草書房
- 吉田久一 (2003) 『社会福祉と日本の宗教思想』勁草書房